

～障害のある人々の 生活を支える～義肢装具士

障害のある人々が生活するうえで手足の代わりとなる義手や義足。手足の機能障害を軽減、補助するための装具を作る義肢装具士は、東京パラリンピックを通して障害者アスリートを支える仕事としても注目されています。一人ひとりに適した装具をつくるには医学知識や製作技術に加えて患者へのコミュニケーションをとることが大切で、豊かな人間性が求められる仕事です。義肢装具士の藤本和希さん（株式会社 澤村義肢製作所）に聞きました。

■ 痛み装具士の仕事とは

義肢とは、事故や病気などにより手足の一部を失った場合に、もとの手足の形や機能を補うために装着・使用する人工的手段のことです。装具とは、事故や病気などにより手足や体幹等の麻痺や変形が起きたり、機能が一部失われたりした場合に、それらを補うために使用する補助器具のことです。治療のために使用する治療用と、治療後に症状が固定し日常生活を送るために使用する更生用のものがあります。

この仕事は、医師・医療スタッフの求められる治療・リハビリーションが円滑に進み、患者さまの生活・やりたいことをお手伝いします。



藤本和希さん（株式会社澤村義肢製作所＝神戸市）

伝いする仕事です。病院や会社等で一人ひとりにあつたより良い義肢装具を作製し、日々チャレンジできる仕事といえます。

■ 製作の方法は

私の職場（澤村義肢製作所）では、解剖学や運動学などの知識が頭に入っている義肢装具士が主となつて実際に製作をします。全ての工程を一貫してひとりの義肢装具士が行っている場合もあり、最適なものを渡しできるよう取り組んでいます。

■ サッカーで膝を 損傷したことから。

私は中、高校とサッカーをしてきたのですが、高校生のときに膝の靭帯を損傷



しました。スポーツを続けるには手術が必要と説明を受け、手術後に膝装具を装着し、そのとき初めて医師や理学療法士

作製目的の把握 ↓

身体機能評価 ↓ 痾肢

装具の設計 ↓ 身体の

採寸・採型 ↓ 製作 ↓ 仮

合わせ → 仕上げ → 最

終適合の手順で完成

させていきます。採型

は、患者さまの身体を

ギブスなどで型を採

ることで、その型を身

体に適合するよう修

正をかけ、金属・プラスチック・皮革・繊維

材料など多種多様な

材料を用い、センスが

問われる部分です。

私の職場（澤村義肢製作所）では、解剖学や運動学などの知識が頭に入っている義肢装具士が主となつて実際に製作をします。全ての工程を一貫してひとりの義肢装具士が行っている場合もあり、最適なものを渡しできるよう取り組んでいます。

■ サッカーで膝を
損傷したことから。

私は中、高校とサッカーをしてきたのですが、高校生のときに膝の靭帯を損傷

しました。スポーツを続けるには手術が必要と説明を受け、手術後に膝装具を装着し、そのとき初めて医師や理学療法士

とは別に義肢装具士という仕事があると知りました。

養成校へ入った後、ユーザーへより良いものを提供したいと思うようになります。在学中にアメリカの会社見学や、研修や実習でオーストラリアやタイなどへ行く中で、義肢装具の考え方・パート等の新製品を日本から海外へ出していく必要があると思いつい、いまの会社に就職することを決めました。国家資格を取り、義肢装具士の仕事に就いて8年余になります。



■日々チャレンジすること

ひとり一人の喜びに直接触れられるのがうれしいですね。義足は、生活の中でつけていることを忘れているようなものが理想です。義足がうまく身体に合っていないと、痛みなどから物事に集中できません。適合した義足であれば、良い病院でリハビリーションすることで歩くこと

ができると思いつい、いまの会社に就職することを決めました。国家資格を取り、義肢装具士の仕事に就いて8年余になります。

養成校へ入った後、ユーザーへより良いものを提供したいと思うようになりました。在学中にアメリカの会社見学や、研修や実習でオーストラリアやタイなどへ行く中で、義肢装具の考え方・パート等の新製品を日本から海外へ出していく必要があると思いつい、いまの会社に就職することを決めました。国家資格を取り、義肢装具士の仕事に就いて8年余になります。

■I-T(情報技術)やA-I(人工知能)による進展も。

義肢製作業界にも最新技術がどんどん導入されています。将来的には、A-Iによつて、最適な義肢装具の選定や、義肢装具の採型・適合といった部分をアシストできると考えています。実際、国内外の大手とタイアップした研究でデータを収集し、どうすれば最適な方法を選定できるかなど、継続して日々考えています。

東京パラリンピックに向けて選手たちが懸命に努力している姿を見て、大きな刺激を受けています。私たちもそれに参加できるのが誇りです。私自身、選手たちの義肢装具のメンテナンスブースでお手伝いすることになり、精一杯貢献していきたいですね。

■義肢装具士に求められること

人間相手の仕事ですから、コミュニケーション能力はなにをおいても大切です。義足にとつて大事な「履き心地」は、人

も走ることも可能となり、当人にとつての大きな自信につながります。

患者さまにとつての100点を目指すところから始まり、100点をもられても、次回には更に要求が高まります。何度もチャレンジを繰り返せる部分にやりがいを感じます。そんな喜びや感激を仲間と共にしながら、日々切磋琢磨しています。

格の人はきつめが好きで、いつもぴたりとしていないと納得できなかつたり、他の方、緩めに作つて自分で調整して自由に履いたりするのが好きな人もいます。最も適な状態までもつていくのがなかなか難しい。患者さまの満足度を高めながらも、さらに運動機能を向上させるものができます。ならうれしい。奥が深い仕事なので、いつまでもチャレンジを続けていきたい。

近年、海外被災地でのNGO活動、また障害を持つ人のスポーツやレクリエーションが活発になつ

ています。これからは義肢装具士には、技術のほかにプラスなにかが求められます。それは語学(英語など)でもいいし、3D技術やデジタル機器に詳しいこと、美術・造形センスかもしれないません。大きなケガや病気で手足を失つた人にとつて、義肢装具は大きな希望です。専門知識を備えた優秀な義肢装具士がますます求められるようになります。活躍の場もどんどん広がっています。

■装具士になる ◎別項



義肢装具士の養成校に入學し、規定の単位を修め、卒業。国家試験に合格すれば義肢装具士になることができる。試験は毎年1回、東京で実施され、臨床医学大要、義肢装具材料学、義肢装具工学などの問題が出題される。

義肢装具士はほかの医療職に比べて、養成校が少なく、従事者もまだ少ない。高齢化が進む日本で義肢装具士の果たす役割は大きくなるとみられる。

ためには。